Bird’s-Eye View・図解ガイド

番号付きのコマ解説を英語の原版と並べて掲載しています。吹き出しと絵の中の文字は原版のままです。

歴史に関する記述や解釈には、それぞれの出典を示しています。

目次

01 · 全80通の音声書簡を見渡す
02 · 対立する三勢力の政治地図
03 · ロックフェラー・カルテルの権力の源
04 · 四兄弟の拡大と後退
05 · 第二勢力をめぐる主張と背景
06 · 同盟の決裂をめぐる主張
07 · 「クレムリンの新支配者」
08 · 貨幣、労働、購買力
09 · 貨幣をめぐる初期の争い
10 · 1913年、新しい通貨制度
11 · 1929年の信用、暴落、大恐慌
12 · 1933〜1971年のドルと金
13 · スタグフレーションの時代
14 · 金準備をめぐる記録と主張
15 · 権力の手段としての戦争
16 · アポロ計画と秘密計画の主張
17 · 1976年の海底ミサイルをめぐる主張
18 · 1977年の「ハーベスト・ムーンの戦い」
19 · 迎撃機とスカイラブをめぐる論争
20 · 月からのビームと二重閃光
21 · 第三の柱とされるコスモスフィア
22 · MX計画と「ミニットマンTX」の主張
23 · ステルスと「幻の航空機」
24 · 誤警報、シャトル、戦争計画
25 · 80通の書簡の全体像

01・全80通の音声書簡を見渡す



英語の原版

1. ベーターは1975年6月から1982年11月まで、80通の音声書簡を録音した。

2. テープ1本は約1時間。全巻を一度聴くには約80時間かかる。

3. オーディオ・ブックス社が1983年に刊行した『Reference Digest』は、全巻の手引きとなる。

4. 初めて聴く人には細部が多く、長年の購読者も何年分もの報告を振り返る必要がある。

5. 政治の面では、対立する三つの勢力と変化する同盟関係を追う。

6. 経済の面では、貨幣、信用、企業の影響力を権力闘争に結び付ける。

7. 軍事の面では、核戦略から宇宙で行われたとされる秘密作戦まで扱う。

8. まずこの概説で全体像をつかみ、詳しくは個々の音声書簡に当たるとよい。

02・対立する三勢力の政治地図



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』は、世界の出来事を、表に出ない部分の多い三勢力の対立として解釈する。

2. ベーターの説明では「ロックフェラー・カルテル」は銀行、石油、企業の利害を結ぶ世界的なネットワークだ。

3. 第二勢力について、原典はベーターが使った論争のある政治的呼称「ボリシェヴィキ・シオニスト枢軸」を用いる。

4. ベーターは「クレムリンの新支配者」について、別の指導層がモスクワでボリシェヴィキに取って代わったと主張する。

5. 関係は時とともに変わる。協力が対立に転じ、再び協力することもある。

6. 闘争は政治、金融、軍事力にまたがる。後の章でそれぞれを追う。

7. 以上は原典が提示する主張であり、ユダヤ人や他のどの共同体についても確立された事実ではない。

8. この政治地図を踏まえ、次章では『参考ダイジェスト』が描くロックフェラー・カルテルを取り上げる。

03・ロックフェラー・カルテルの権力の源



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』によると、1975年のシリーズ開始時に三勢力のうち最も強かったのはロックフェラー・カルテルだった。

2. 石油大手、銀行、多国籍企業を結ぶ世界的なネットワークが描かれている。

3. その力の源を、ジョン・D・ロックフェラー・シニアとスタンダード・オイルの成長にたどる。

4. 1911年にスタンダード・オイルが分割された後も、別会社の背後で実質的な協調が続いたと同書は主張する。

5. この解釈では、経済力が政治力につながり、その政治力が事業の拡大を後押しする。

6. 報道や教育にも影響を及ぼし、その権力について人々が知る内容を左右したとも主張する。

7. 慈善活動やロックフェラーが10セント硬貨を配った逸話を、世間向けのイメージの変化と関連付けている。

8. 非課税の財団が慈善活動、諸機関、企業の利害を結ぶと描いている。

04・四兄弟の拡大と後退



英語の原版

1. 同書は一族を三世代にわたってたどり、第二次世界大戦後の四兄弟に焦点を当てる。

2. ジョン・D・3世、ネルソン、ローレンス、デイヴィッドが、それぞれ異なる分野で影響力を調整したと描かれる。

3. ネルソンを中南米と、ジョン・D・3世をアフリカでの企業拡大と関連付ける。

4. ローレンスは航空、宇宙、防衛と、デイヴィッドは銀行、情報機関の利害と結び付けられる。

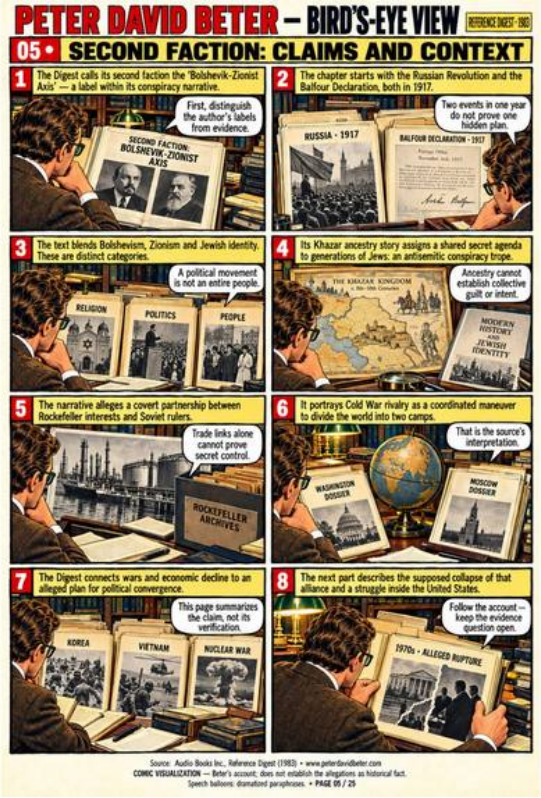
5. 戦後の拡大を石油収益と対外援助に帰し、1973年の石油禁輸を転機とみなす。

6. ベーターは1974〜75年の金準備をめぐる論争と、1976〜77年にクレムリンとの同盟が決裂したという主張を、苦境に結び付ける。

7. 原典は、1978〜79年のジョン・D・3世とネルソンの死を、秘密の権力闘争の一部と位置付ける。

8. シリーズが終わる1982年には、再編されたカルテルが失った影響力を取り戻そうとしていたと記す。

05・第二勢力をめぐる主張と背景



英語の原版

1. 「ボリシェヴィキ・シオニスト枢軸」は、同書が陰謀論的な筋書きの中で第二勢力に付けた呼称である。

2. 章の冒頭では、いずれも1917年に起きたロシア革命とバルフォア宣言を取り上げる。

3. 原典はボリシェヴィズム、シオニズム、ユダヤ人としてのアイデンティティーを混同する。これらは別の概念である。

4. ハザール起源説をもとに、何世代ものユダヤ人に共通の秘密の目的があるとする反ユダヤ主義的な陰謀の語りである。

5. ロックフェラー側とソ連の支配層がひそかに協力したと主張する。

6. 冷戦の対立を、世界を二陣営に分割するための協調作戦として描く。

7. 戦争や景気の悪化を、政治体制を収斂させるための計画があったという主張と関連付ける。

8. 次章では、その同盟が崩れたという主張と、米国内の対立を取り上げる。

06・同盟の決裂をめぐる主張



英語の原版

1. スターリンの死後、秘密の反ボリシェヴィキ勢力が徐々にソ連指導部に取って代わった、とベーターは主張する。

2. 『参考ダイジェスト』は、一部のソ連からの移住を失脚した政治関係者の追放と解釈する。

3. 決裂を1976年の海底ミサイルと1977年の秘密宇宙戦をめぐる主張に結び付ける。

4. ロックフェラー側が元ソ連側の協力者を米国の要職に迎え入れたと記す。

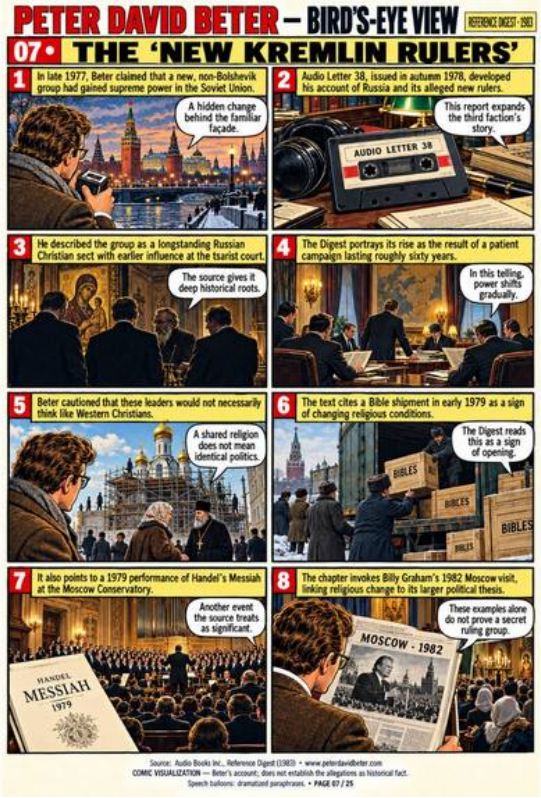
5. その後の争いを、企業による支配と国家機構を通じた支配の対立として描く。

6. 国防総省の政策、ガイアナの悲劇、ロックフェラー一族の死を、権力闘争があったという主張に結び付ける。

7. 1982年までに、クレムリンとカルテルが共通の対抗勢力に対して限定的な了解に達したとする。

8. 章の末尾は中東での緊張拡大に警鐘を鳴らす。次章は「クレムリンの新支配者」を扱う。

07・「クレムリンの新支配者」



英語の原版

1. 1977年末、ソ連で非ボリシェヴィキの新集団が最高権力を握ったとベーターは主張した。

2. 1978年秋公開の音声書簡第38号で、ロシアとその新支配者に関する主張を詳しく述べた。

3. 彼はこの集団を、かつて帝政ロシアの宮廷にも影響力があった、歴史の長いロシアのキリスト教一派と説明した。

4. 『参考ダイジェスト』は、その台頭を約60年に及んだ粘り強い活動の結果として描く。

5. ベーターは、この指導層が西洋のキリスト教徒と同じ発想をするとは限らないと注意した。

6. 本文は、1979年初めに聖書が送られたことを、宗教をめぐる状況の変化の兆しとして挙げる。

7. 1979年にモスクワ音楽院でヘンデルの『メサイア』が演奏されたことにも言及する。

8. 1982年のビリー・グラハムのモスクワ訪問を挙げ、宗教の変化をより広い政治的主張と結び付ける。

08・貨幣、労働、購買力



英語の原版

1. 経済編は貨幣の日常的な役割から始まる。貨幣は物々交換よりも取引を容易にする。

2. 『参考ダイジェスト』は貨幣を、専門化、協力、分業に結び付ける。

3. 生産を組織化すれば、基本的な生活に必要な量以上の生産が可能になると論じる。

4. 原典は、その余剰によって社会が芸術、文化などの活動を支えられるとする。

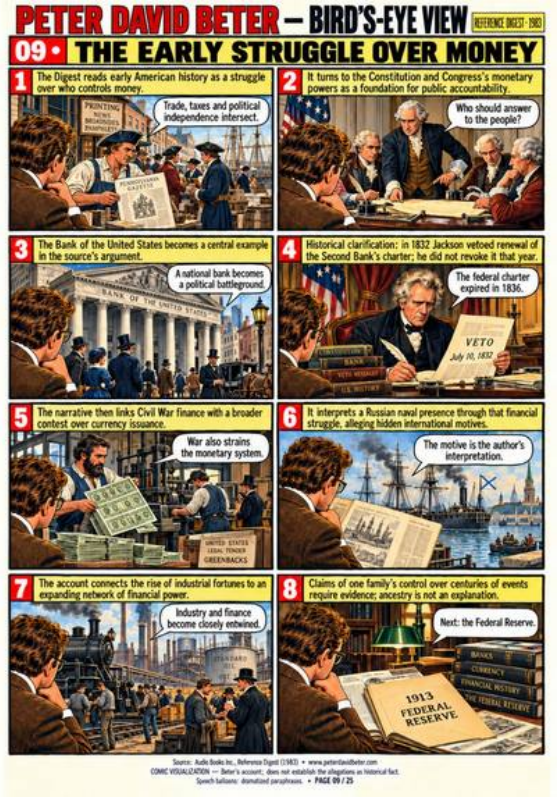
5. 貯蓄によって、今日の収入の一部を将来に持ち越せる。

6. 物価が上がると、同じ金額で買える量は減る。インフレは現金での貯蓄の購買力を損なうことがある。

7. そこで貨幣の用途から、発行と信用供与を担う機関の権力へと話題が移る。

8. 貨幣の不安定さを意図的な操作と解釈する。続くページでは、その議論を米国史に沿って追う。

09・貨幣をめぐる初期の争い



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』は、米国の初期の歴史を、誰が貨幣を管理するかをめぐる争いと読む。

2. 憲法と連邦議会の貨幣に関する権限を、公的な説明責任の基礎として取り上げる。

3. 合衆国銀行がこの議論の中心的な事例となる。

4. 史実の補足。1832年、ジャクソンは第二合衆国銀行の認可更新に拒否権を行使した。その年に認可を取り消したわけではない。

5. 続いて南北戦争の資金調達を、通貨発行権をめぐるより広い争いにつなげる。

6. ロシア艦隊の活動もその金融上の争いと結び付け、国際的な思惑が隠されていたと主張する。

7. 産業界の富豪の台頭を、金融権力のネットワークの拡大と関連付ける。

8. 一族が何世紀もの出来事を支配したという主張には証拠が要る。家系だけでは説明にならない。

10・1913年、新しい通貨制度



英語の原版

1. 銀行の不安定さを背景に、米国で新たな中央銀行制度がつくられた。

2. 連邦準備制度が設立されたのは1913年である。同書はその出来事を物語の転機とする。

3. 原典は、通貨の安定を制度が公に掲げた約束として記す。

4. 連邦準備制度を単なる一族の私企業として描くのは、制度を単純化しすぎている。

5. ロックフェラー側が秘密の金融提携で主導的な役割を果たしたと『参考ダイジェスト』は主張する。

6. 銀行業と産業が戦後に拡大する中で、この勢力均衡が続いたという筋書きを追う。

7. 1970年代末には、この同盟に亀裂が入り、主導権争いが生じたと描く。

8. 次章では1929年の株価暴落と大恐慌を例に、貨幣をめぐる権力は濫用され得ると論じる。

11・1929年の信用、暴落、大恐慌



英語の原版

1. 大恐慌についての記述は、借りやすい資金に支えられた株式市場の好況から始まる。

2. 信用取引で株を買うと、投資家は手元資金を超える損失を被り得る。

3. 原典は信用の引き締めがこの不安定な構造を揺さぶったと論じる。

4. 強制売却は価格を押し下げ、さらなる売りを招き得る。同書はこうした連鎖を軸に説明する。

5. 続いて、株式市場から銀行の破綻と社会の信頼喪失へ話題を移す。

6. 銀行の破綻や信用の縮小を通じ、衝撃は家計、雇用、企業へ波及する。

7. 現金を持つ買い手が経営難に陥った資産を安く取得できたと強調し、事前の協調があったと主張する。

8. 歴史研究は連邦準備制度の重大な失策を記録している。同書はさらに、意図的な計画だったと主張する。

12・1933〜1971年のドルと金



英語の原版

1. 大恐慌を受け、1933年の全国的な銀行休業を含む緊急措置が取られた。

2. ルーズベルトの金政策は、通貨用の金の民間保有を制限し、国内での兌換を改めた。

3. 同書への訂正。1934年金準備法によって、通貨用の金は米財務省に移された。連邦準備制度への贈与ではなかった。

4. ドルの国際的役割の拡大を戦後体制の中心に置く。

5. 1968年を、連邦準備券に対する法律上の金準備要件を取り除く新たな段階とする。

6. 1971年、ニクソンは外国の公的機関によるドルの金兌換を停止し、「金の窓口」を閉じた。

7. 『参考ダイジェスト』は金兌換から離れることを操作への道と見る。法定通貨も制度と社会の信認に依存する。

8. ここからインフレ、金利、景気停滞へと話が移る。

13・スタグフレーションの時代



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』は、成長や雇用が弱る一方で物価が上がる経済を描く。

2. スタグフレーションとはインフレと景気停滞が併存する状態で、一般に失業率も高い。

3. 借入費用が増すと、投資、企業支出、家計が圧迫されることがある。

4. 原典は、景気回復が繰り返されるたびに再びインフレ圧力がかかる様子を描く。

5. ベーターの1973年の著書『The Conspiracy Against the Dollar』を先行する警告として引用する。

6. 意図的に経済を破壊したというのは同書の解釈である。インフレと停滞には複数の原因が相互に関係する。

7. 繰り返し問われるのは、名目上の貯蓄額と、それで実際に買える量の差である。

8. 原典は将来の通貨崩壊と金への回帰を予測する。ここで述べているのは予測であって、確定した結果ではない。

14・金準備をめぐる記録と主張



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』は、予測した危機の後に通貨への信頼を取り戻すうえで金が重要な役割を担うとする。

2. 1961年に発足したロンドン金プールを、公的な金が国外へ移動した経路として挙げる。

3. 続く数年間に、米国の保管施設から大量の金が発送されたと記す。

4. 公式記録にない秘密の移送があったとも別途主張する。

5. この主張を検討するには、帳簿上の準備、現物の保有、保管先を区別する必要がある。

6. 通貨が崩れる際には、金の所有が少数に集中していれば権力をもたらすと論じる。

7. その経済上の警告は、一般の人々の労働が生む価値と貯蓄の安全に立ち返る。

8. ここから貨幣をめぐる権力を離れ、戦争、秘密戦略、存在が主張される秘密兵器へと話が移る。

15・権力の手段としての戦争



英語の原版

1. 軍事編は、人的犠牲が甚大であるのになぜ戦争が続くのかと問う。

2. 『参考ダイジェスト』は、戦争を国外に影響力を広げるための手段として描く。

3. また、非常時に政府が国内での統制を強めることがあると指摘する。

4. 原典は、有力財団が戦争を世界政府の長期構想と結び付けたと主張する。

5. ウィルソンの平和を掲げた選挙運動と、米国の第一次世界大戦参戦を対比する。

6. その後の戦争も同じ長期計画があったという前提で解釈する。

7. 続けて、兵器技術の急速な発展が当初の勢力均衡を崩したと論じる。

8. 宇宙飛行とビーム兵器が、この物語の次の転機となる。

16・アポロ計画と秘密計画の主張



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』は宇宙時代とレーザーの登場を重ね、新しい戦略領域の出現を描く。

2. ケネディが1961年に掲げた月到達の目標が、公になっている経緯の起点となる。

3. アポロの月面着陸は公の計画である。同書はそこに秘密の軍事目的があったという主張を加える。

4. 1972年12月のアポロ17号以降にも、非公開で月への飛行が続いたと原典は主張する。

5. そうした飛行の拠点としてディエゴガルシアを挙げる。

6. スカイラブには月への中継地点という秘密の役割があったとしている。

7. 月面基地が地球を狙うビーム兵器を支えるはずだったとする。

8. クレムリンの新指導層が計画を知り、対抗措置を準備したと記す。

17・1976年の海底ミサイルをめぐる主張



英語の原版

1. 1976年夏、ベーターはソ連が米国沿岸の標的近くにミサイルを配備したと報じた。

2. 原典は、小型で静かな潜水艦が独立したミサイル設備を海底に設置したと描く。

3. 標的近くから攻撃された場合、警戒できる時間がごく短いという危険が主張された。

4. 『参考ダイジェスト』は、ベーターによる公表を受け、ジョージ・S・ブラウン将軍が対応を求めたとする。

5. ミサイルの撤去をめぐり意見が割れ、フォード大統領が撤去を承認したと記す。

6. ベーターは1976年9月に国防総省で会合があり、追加の位置情報を提供したと報告した。

7. 一部の兵器は撤去されたが、残ったものもあり、危機は解決しなかったとする。

8. さらに後になって、ソ連を標的にした米国のより大型の海底ミサイルがあると別の主張を加える。

18・1977年の「ハーベスト・ムーンの戦い」



英語の原版

1. 次の転機は、ハーベスト・ムーンの夜、1977年9月27日に攻撃があったという主張である。

2. 『参考ダイジェスト』は、米国の秘密軍事基地が月のコペルニクス・クレーターにあったとする。

3. 基地のビーム兵器が稼働できる段階に近づいていたと記す。

4. ソ連の軌道兵器が粒子ビームを使い、基地を機能停止に追い込んだと主張する。

5. 米国の要員は死亡し、基地は沈黙したとする。

6. この戦いをコスモス954号と結び付け、後のカナダでの事故を緊急着陸と読み替える。

7. この勝利とされる出来事を、ソ連が宇宙で戦略的優位を得た出発点として描く。

8. 同書が想定する宇宙の三本柱は、迎撃機、月のビーム兵器、浮遊型コスモスフィアである。

19・迎撃機とスカイラブをめぐる論争



英語の原版

1. 存在が主張される宇宙戦力の三本柱の第一は、衛星を破壊する迎撃機の部隊である。

2. 同書は、これらの機体に粒子ビーム兵器が搭載されていたとする。

3. 1977年末から1978年春にかけて、米国の偵察衛星と早期警戒衛星が破壊されたと主張する。

4. そうした脆弱性があったという主張を、軍備交渉での圧力と関連付ける。

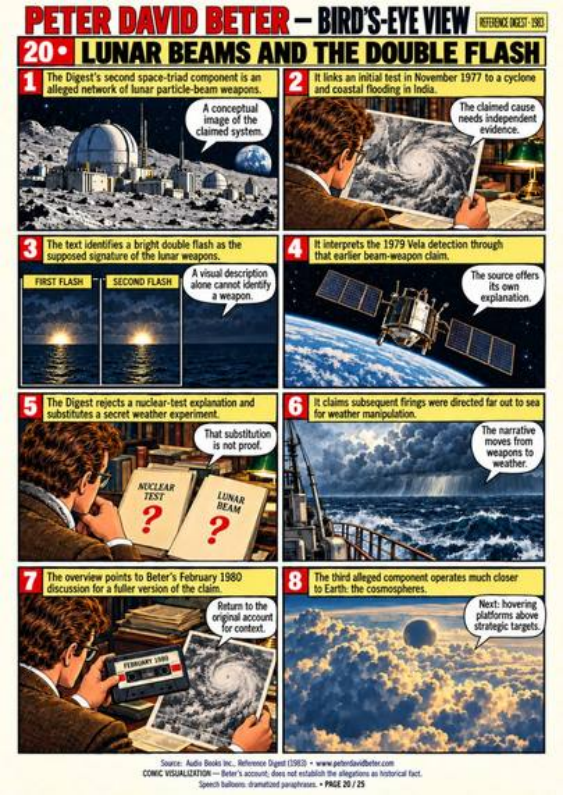
5. 1978年4月の韓国旅客機事件を、情報収集活動として解釈する。

6. 月への再到達を阻むため、1977年10月にスカイラブが破壊されたと『参考ダイジェスト』は主張する。

7. NASAの記録ではスカイラブの再突入は1979年7月11日である。同書は公の記録を隠蔽用の説明と扱う。

8. 次は軌道上の機体から、月の兵器ネットワークが存在したとする主張へ移る。

20・月からのビームと二重閃光



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』が挙げる二つ目の柱は、月の粒子ビーム兵器網が存在したという主張である。

2. 1977年11月の最初の試験と、インドのサイクロンおよび沿岸部の浸水を結び付けている。

3. 明るい二重閃光が、月の兵器の特徴だと原典はみなしている。

4. 1979年に衛星ヴェラが検知した現象を、このビーム兵器の主張に沿って解釈する。

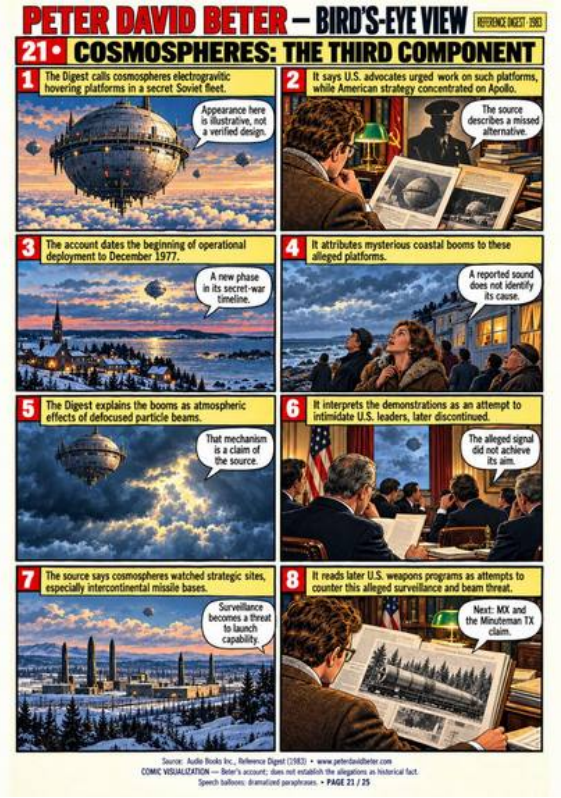
5. 『参考ダイジェスト』は核実験による説明を退け、秘密の気象実験だったと述べる。

6. その後の発射は気象を操作するために遠洋へ向けられたと主張する。

7. より詳しい主張を知るには、ベーターの1980年2月の論述を参照するよう案内する。

8. 三つ目とされるコスモスフィアは、地球にずっと近いところで活動するという。

21・第三の柱とされるコスモスフィア



英語の原版

1. 同書は、コスモスフィアを電気重力で浮遊するソ連の秘密艦隊のプラットフォームと呼ぶ。

2. 米国にもそのような機体の研究を求める人々がいたが、米国の戦略はアポロ計画を重視したとする。

3. 原典は、実戦配備が1977年12月に始まったとしている。

4. 沿岸部の不可解な爆音を、そうした機体によるものとする。

5. 粒子ビームの焦点を外すことによる大気の作用で爆音が生じたと説明する。

6. 米国の指導者を威圧するための誇示で、後に中止されたと読む。

7. コスモスフィアが戦略施設、特に大陸間ミサイル基地を監視していたとする。

8. 後の米国の兵器開発を、そうした監視やビーム兵器の脅威に対抗する試みと解釈する。

22・MX計画と「ミニットマンTX」の主張



英語の原版

1. MX計画についての公の説明が別の目的を隠していたと『参考ダイジェスト』は論じる。

2. 移動配備をめぐる論争を、配備されたとする小型ミサイルから注意をそらすものとみなす。

3. ベーターは1980年6月の報告で、そのシステムとされるものをミニットマンTXと呼んだ。

4. 原典によると、専用の鉄道車両で米国の鉄道網を通じてミサイルを移動させたという。

5. 購読者の撮影した写真が速報に掲載され、裏付けとして挙げられている。

6. 後のMXに関する決定や小型移動ミサイルの議論を、これ以前の主張に結び付ける。

7. 多数の発射機が移動すれば、コスモスフィアによる監視とされる能力を上回る、という説明である。

8. この話を将来の先制攻撃計画の一部に据え、続いてステルスを取り上げる。

23・ステルスと「幻の航空機」



英語の原版

1. 『参考ダイジェスト』は、秘密の目的があると主張する公の計画の第二例に、ステルスを挙げる。

2. 主張を秘密の艦艇にも広げ、1982年の南大西洋の紛争に結び付ける。

3. ベーターは1982年春の報告で、「幻の戦闘機」と呼ぶものを描写した。

4. 電磁場によって機体の周囲で光を曲げられると原典は主張する。

5. そのため、レーダーに探知されにくいだけでなく、目にも見えなくなると主張する。

6. 高度な計算技術と超伝導を持ち出しているが、検証できる設計は示していない。

7. 同じ電磁場でビーム兵器を防げるという主張も付け加える。

8. こうした能力とされるものを、核戦争に備えるという大きな筋書きに組み込む。

24・誤警報、シャトル、戦争計画



英語の原版

1. 軍事編の結びに、先制攻撃を反撃に見せかける計画があったとする主張が出る。

2. 原典は核攻撃の誤警報を、単なる事故ではなく意図的な予行演習とみなす。

3. この筋書きでは、部隊は既に始まった攻撃に報復していると思い込むことになる。

4. 原典は、米国が宇宙で継続的に軍事行動を行う能力が制限されたとも主張する。

5. そこで公のスペースシャトル計画には、非公開の偵察任務があったとする。

6. 計画の指導部を、軍事目的が隠されていたとする論拠の一部に挙げる。

7. 高度な技術と政治的な欺瞞が戦争の危険を拡大し得ると警告する。

8. 概説の結びでは三つの勢力に立ち返り、ベーターがその争いに与えた意味を考える。

25・80通の書簡の全体像



英語の原版

1. ベーターは80通の音声書簡を通じ、一見無関係な出来事を結ぶ一つの隠れた枠組みを提案した。

2. 物語の中心には、三つの対立勢力と変化する同盟関係がある。

3. 1976〜77年に決裂したという主張から、米国内の闘争と後の限定的な同盟につながる。

4. 経済、情報活動、軍事技術が、この闘争とされるものの主な分野である。

5. ベーターはこの対立を精神的、道徳的な観点からも描く。

6. ベーターの健康悪化により、シリーズは1982年11月に終了した。1983年の『参考ダイジェスト』はその記録を回顧する。

7. 原典の書簡は独立した記録と照らして読む。発言の帰属、時系列、証拠が重要である。

8. このコミックは原典への図解による入り口である。原典の代わりや、主張の裏付けとしては扱わない。